

ゆき 雪だるまの スパイシーと かん 完ぺきな クリスマスプレゼント

むかしむかし
昔々、はるか かなたの 寒〜い くに、スパイシーという
ゆき
雪だるまが 住んでいました。スパイシーは、とくべつ
ゆき
雪だるまでした。歩いたり、しゃべったり、歌ったり
できるのです！ それに・・・飛びはねることだって、
できました！

スパイシーは、つき あ 月明かりの した うた うた
大好きでした。暗い 夜空に 満月が のぼると、スパイシーは
むね は 胸を 張って、楽しい ゆき
雪だるまの うた うた
歌を 歌いました。

ある きゅうか
休暇シーズンの ことです。スパイシーは、ララという
ゆき
雪だるまの 女のおんな こ 子と 友だちになりました。ララは とても
かわいらしい ゆき
雪だるまで、スパイシーと おんな とくべつ
同じく 特別な
ゆき
雪だるまでした。おお 大きな キラキラ かがや め
目の ララも、
うた
歌うのが だい す
大好きでした。

スパイシーは、ララに とくべつ
特別な クリスマスプレゼントを
あげたいと おも
思いました。（だけど、いったい なに
いいんだろう？） ゆき
雪の 中を てくてくと ある
歩きながら、
スパイシーは いろいろと かんが
考えました。何か 特別な もの・・・
か
変わった もの・・・ おお 大きな もの・・・ いま
今までに かのじょ
彼女が
もらった ことも ない、とくべつ
特別な もので なくては！



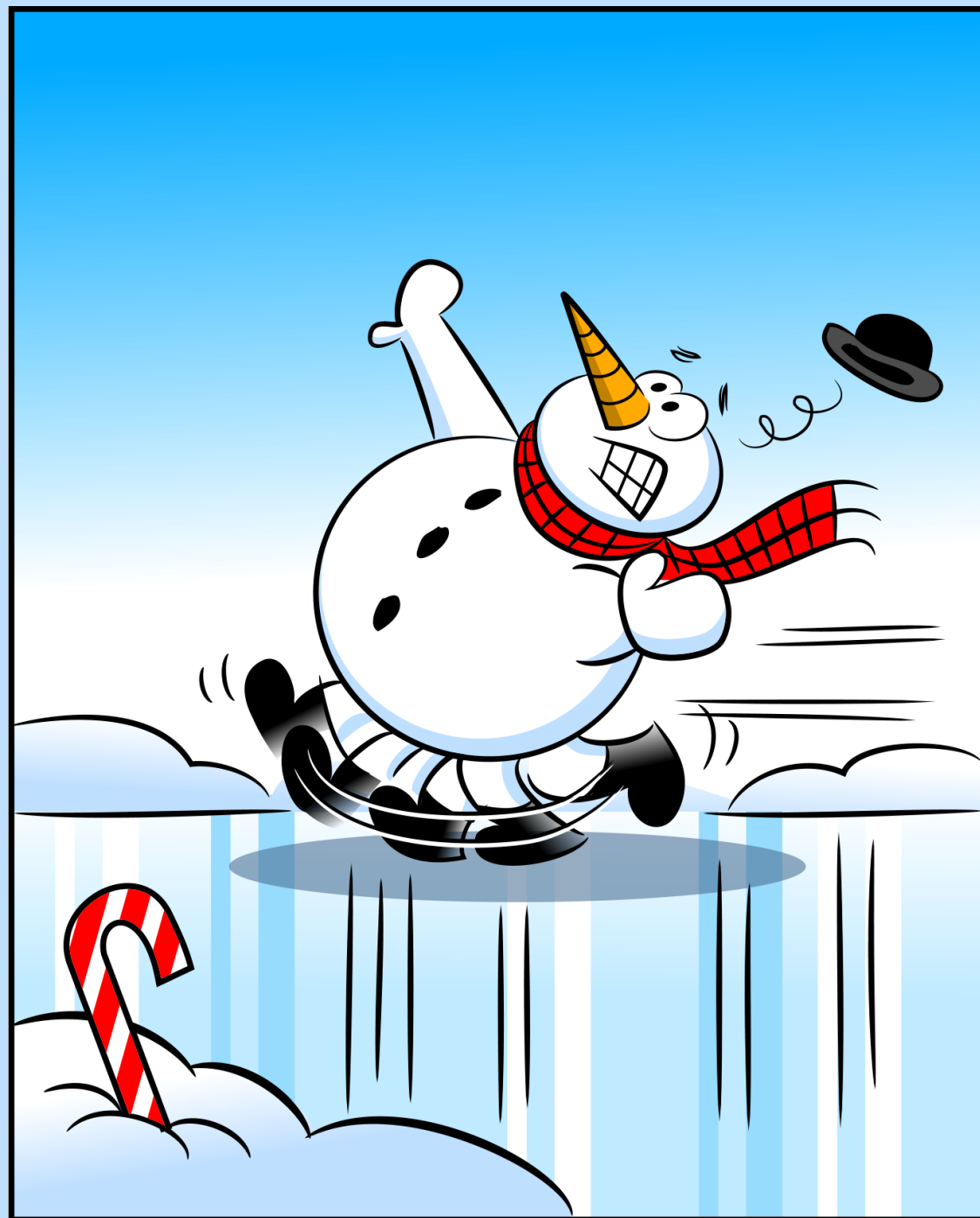
「いてっ!」 ^{おお}大きな ^{ゆき}雪の ^{からだ}体が ずっこけて、
スパイシーは ^{おも}思わず ^{こえ}声を あげました。「あ〜、またか。
^{みずうみ}湖が こおっている ことを、すっかり わすれていたよ。」
スパイシーは そう つぶやきながら、^お起き ^あ上がりました。
「だが、^ま待てよ・・・。」スパイシーの ^{あたま}頭に、アイデアが
ひらめきました。「^{なん}ぼくは 何て かしこいんだろう! そうだ、
それが いい。^{だい}ララの ^す大好きな クリスマスキャロルに
^あ合わせて すべれるように、^{れんしゅう}練習するんだ。 ^{さいこう}最高の
スケーターに なるぞ。きっと、^{よろこ}ララは 喜んでくれるだろうな。
^{かのじょ}彼女にとって、^{さいこう}最高の プレゼントに なるぞ!」
スパイシーは ゆかいそうに、^{ゆき}雪だるま ^{わら}笑いを しました。
そして、^{こおり}氷の ^{うえ}上に ^{おお}大きく ^{いっ}一歩 ^ぼふみ出しました。けれども、
^{おお}大きな ^{ゆき}雪の ^{からだ}体は、^{こおり}またもや ^{うえ}氷の 上で すってんころりん、
ドッシーン。
「こりゃあ、かなりの ^{れんしゅう}練習が ^{ひつよう}必要に なりそうだな。」と
スパイシーは ^{おも}思いました。



こおり うえ 氷の上でちゃんとバランスを保てるように、
スパイシーは にちじゅう ひっし れんしゅう 1日中、必死に練習しました。そして
とうとう、ころ 転ばないでひとすべりできるくらいまでに
なりました。「やったー！」 スパイシーは おおごえ 大声を
あげながら、みずうみ うえ 湖の上をすべりました。
「行くぞー・・・うわああ！」

ズボッ！ スパイシーは、みずうみ はんたいがわ きし ゆき 湖の反対側の岸の雪の
なか あたま 中に、頭から つっこんでしまいました。「やれやれ。
すべる ことはできたけど、と 止まり方も かな まな 学ばなくちゃ
いけないってこと、わすれてたよ。」 スパイシーは、
うめきながら お あ 起き上がりました。「やっぱり、ぼくには
スケートなんて、む 向いてないな。それに、ララだって、
こんなプレゼントは もらっても おもしろくないだろうし。」

むねの ボタンを なお 直していると、なに はんぶん ゆき なか 何かが半分雪の中に
うまっているのに め 目がとまりました。あざやかな あか 赤い
いろ かたち 色で、Jの形をしています。キャンディケインです！



スパイシーは、^{おも}思わず
うれしくなりました。雪で ^{ゆき}できた
手で ^てキャンディケインを ^はにぎりながら、
これが ^{ふくろ}袋に ^{はい}いっぱい入っていたら、
ララみたいな ^{とくべつ}特別な ^{ゆき}雪だるまに
ぴったりの、すばらしいプレゼントに
なるだろうな、と ^{おも}思いました。
「^{いま}今までに ^{だれ}だれも ^{もら}もらった ^{こと}ことが
ないくらい ^たたくさんの ^{かん}キャンディケインを
^{ふくろ}袋いっぱい ^ああげるぞ。ララも ^ききっと、
^{よろこ}喜んでくれるさ。」

スパイシーは、^{たか}高い ^{ところ}所を ^{さが}さがしました。
そして、^{ひく}低い ^{ところ}所も ^{さが}さがしました。
けれども、キャンディケインは ^{いじょう}それ以上
^み見つかりません。ついに ^みスパイシーは
^{さが}さがしつかれ、^きどさっと ^き木に ^ももたれて
すわりこんでしまいました。このころには、
もう ^{たいよう}太陽は ^{しずみ}しずみかけ、^{うつく}美しい ^{つき}月が
だんだんと ^{ひかり}光を ^ま増して ^{あか}明るくなってきて
いました。

「^{けっきょく}結局のところ、キャンディケインを
^{かんが}あげるのは、あまり ^{かんが}いい ^{かんが}考えじゃ
なかったんだよ。それに、そろそろ ^{ぼく}ぼくの
^{つきあ}月明かりの ^{うた}歌を ^{うた}歌う ^{じかん}時間だなあ。」



スパイシーが 歌を 歌おうとして 大きく
息を すうと、小さな ホタルが 飛んできて、
スパイシーの にんじんで できた 鼻に
止まりました。ホタルが 光を 放ったので、
スパイシーの 鼻は あざやかな オレンジ色に
て 照らし出されました。スパイシーは 歌を
歌う代わりに、息を ふきかけて ホタルを
追いはらおうと しました。「シーツ、シーツ。
この チビすけ、あっちへ 行け。」
スパイシーは 少し いらいらしてきました。

その時です。またもや アイデアが
ひらめきました。「そうだ、それなら いいかも！
ぜったいに いいぞ！」すぐさま、スパイシーは
自分の 黒い ぼうしを 取って ホタルに
かぶせ、にげないように 冷たい 雪の 手で
おおいました。

「おまえたちを この ぼうし いっぱいに
なるくらい つかまえて、いちばん 大きくて
きれいな モミの木に 放ってやろう。今までに
だれも 見た ことの ないような、最高の
クリスマスツリーに なるぞ！ ララに
あげられる、完ぺきな プレゼントに
なるだろうな。」



すると、また 1ぴきの ホタルの 光が スパイシーの
目につきました。スパイシーは すかさず 次の
ホタルを 追いかけて、ぼうしを かぶせて つかまえました。
スパイシーは 長い 時間を かけて、1ぴき、そして また
1ぴきと、ホタルを 追いかけては つかまえていきました。
けれども、あわれな スパイシーは、次の 1ぴきを
つかまえるたびに、前の 1ぴきが にげてしまっている
ことに 気づきませんでした。しばらく 走り回った 後、
ついに スパイシーは 走るのを やめました。そろそろ
ぼうしの中が いっぱいになった ころだと思っ 中を
見た スパイシーは、がっかりしてしまいました。中に
いたのは、たったの 1ぴきだけだったからです。

スパイシーは 悲しくなりました。ぼうしを わきに 置いて、
雪の 上に すわりこみました。目から 氷のように 冷たい
なみだが 出てきて、ぽろんと ほおを 伝い落ちました。

「ララに、最高の クリスマスプレゼントを あげたかった
だけなのに。もう 明日は クリスマスだ。それなのに、まだ
完ぺきな プレゼントが 見つからないなんて。」と、
スパイシーは つぶやきました。

スパイシーは 大きな 雪の 手で 黒い 真ん丸な 目を
おおって、しくしく 泣き始めました。

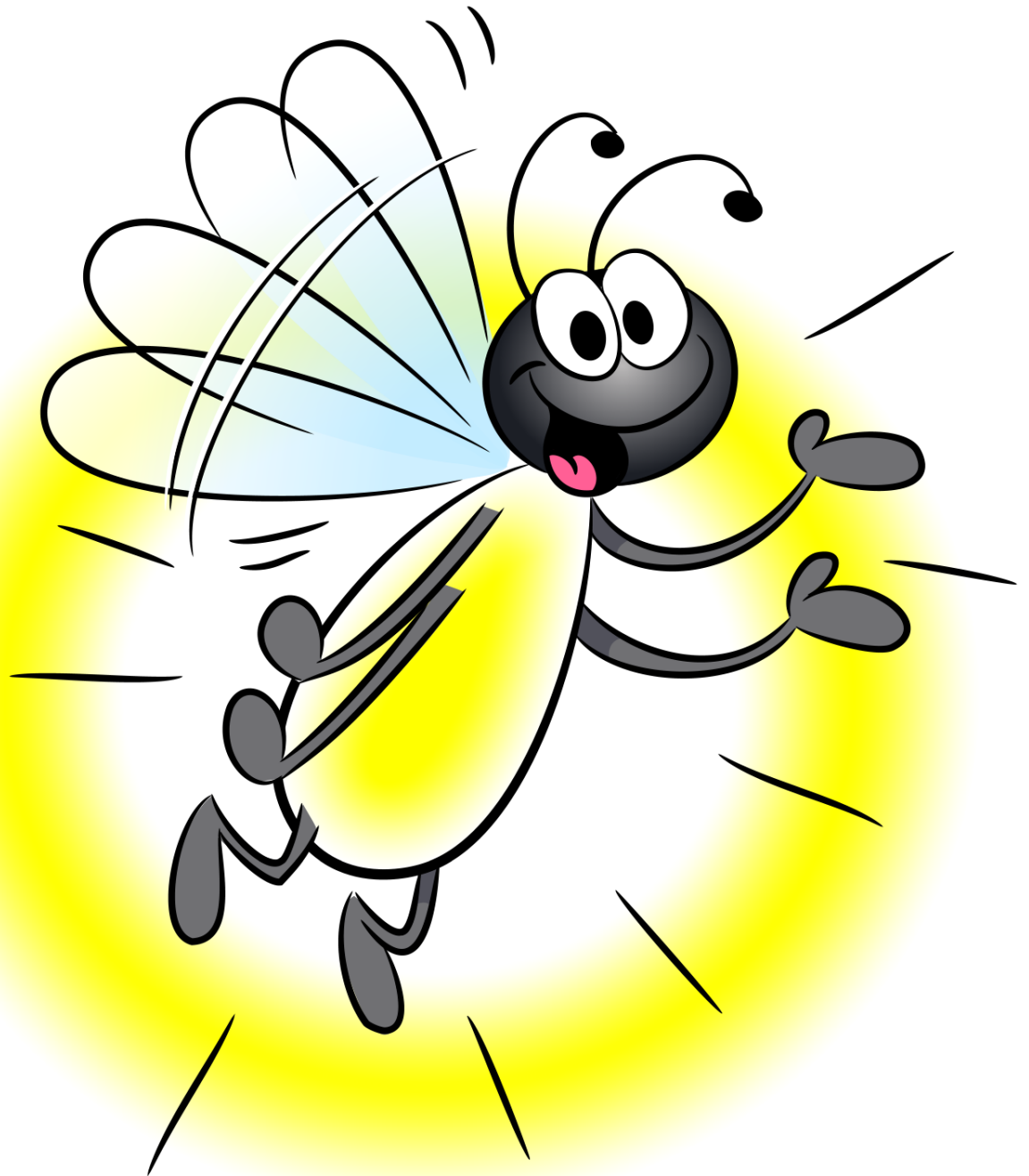


すると、^{しず}静けさの^{なか}中から、^{ほそ}か^{こえ}細い声が
しました。「完^{かん}ぺきな^{べつ}プレゼントって、別に
^{おお}大きく^{さいこう}なくてもいいんだよ。最高に^め目を
^みは^は見張るようなものでなくてもいいんだ。」

おどろいたスパイシーは、ぼうしの^{なか}中から^で出てきて^あふわっとまい上がった
ホタルを^み見^あ上げました。「待^まって！^{いま}今、何^{なん}て
い^い言ったの？」と、スパイシーが^{たず}ねました。

すると、ホタルが^{こた}答えました。「最高^{さいこう}の
プレゼントは、最高に^{さいこう}ちっちゃいものって
こともあるんだ。それが、^{あい}愛のこもった
ものならね。」

スパイシーは^{すこ}少しの^{あいだ}間、そのことに
ついて^{かんが}考えてみました。そして、^{いま}今まで^{ずっと}ずっと、
しているべきだったことを^{おも}思い^だ出しました。
スパイシーは^{おお}大きな^{ゆき}雪の^て手を^く組み、
^よ夜空を^み見^あ上げて^{いの}お祈りをしたのです。
「神様。ぼくは^{ゆき}雪だるまの^{だい}ララが^す大好きです。
だから、^{とくべつ}特別な^{クリスマスプレゼント}クリスマスプレゼントを
あげたいんです。^{おお}大きく^{かま}なくてもかまいません。
だけど、^{とくべつ}特別なものをあげたいんです。どうか、
^{なに}何を^{おし}あげたらいいか、教えてください。」



スパイシーが目を開けると、目の前の地面の雪が
とけ始めました。そして、みるみるうちに美しい青い花が
さいたのです。

(すごいぞ!) スパイシーは雪の手をのばして、
このきれいな花をつみました。「神様、ララのために、
このすばらしいおくり物をくださって、ありがとう!」

クリスマスの朝です。雪だるまのスパイシーは幸せで
いっぱいでした。ララに、特別なクリスマスプレゼントを
あげられたのですから。

「スパイシー、最高のプレゼントをありがとう!」

ララはわくわくしながら言いました。そして、スパイシーに
陽気な雪だるまハグをしました。「あなたはわたしの
最高の友だちだわ!」

スパイシーとララは、手をつないで雪の中で
おどりながら、胸を張って、ゆかいな雪だるま歌を
歌いました。二人の声がそこら中に鳴りひびくと、大きな
丸い雪の結晶が空から降ってきて、地面にまた1枚、
雪の毛布をかけました。スパイシーとララにとって、
それは完ぺきなクリスマスでした。



文: ジャズミン・セント・クレアとキー・プール

子供向け特別版アクティベーターVol.1, Issue 2からの編集

Copyright © 2005年、オーロラ・プロダクションズAG、スイス 不許複製、使用許諾取得済

絵: ゼブ デザイン: ステファン・ミラー 出版: マイ・ワンダー・スタジオ

Copyright © 2013年、ファミリーインターナショナル

"Snowman Spicy & the Perfect Christmas Present"--Japanese

<http://www.mywonderstudio.com/0-5/2013/12/23/snowman-spicy-and-the-perfect-christmas-present.html>